皇大神宮(内宮)のお膝元 宇治のまち 歴史めぐり ガイドマップ

発行:進修まちづくりの会
伊勢市宇治浦田2−1−46
TEL0596(64)8812

(記号)
:バス停

0 50 100 150m

宇治の街(内宮の門前町)

宇治の街は、内宮の門前町として発展しました。平安期の末頃から武家の存在が強くなって、将軍・大名を始め武家などが、「氏の安泰」「氏の武運長久」「氏名隆昌」等の祈願を求めるようになり、神宮の師職が中継ぎをする様になりました。その『御師(おんし)』と云う人達が館を建てて祈願をして、願のこもった大麻(おふだ)を祈願者に届けるようになり、時代と共にお伊勢参りが盛んになりました。江戸時代半ばの安永6年(1777)ごろには、御師の数が外宮が479軒、内宮が271軒あり、文政13年(1830)のおかげ参りの際には、486万人を越す参拝者がありました。

明治までは宇治橋内にも人家があり、地名を上館と云いましたが、下館へ移転となり神苑になっています。下館は宇治館町と言います。宇治橋前は上之切・中之切・下之切と言いましたが、現在は宇治今在家町・宇治中之切町・宇治浦田と地名が変わり、この4ヶ町を宇治の街と言っています。皇大神宮のお膝元「宇治の街」の中で、神宮の史跡や街並みを、思う存分ご散策下さい。

❶宇治惣門跡(うじそうもんあと)

宇治惣門とも呼ばれ、参宮街道の牛谷坂を下った所に、宇治の門前町入り口として設けられた番屋が、明治維新までありました。「門づくし」のひとつにかぞえられ、門が取り払われた後も石垣は残っていましたが、現在は惣門公園として残されています。その門は俗に「黒門」と呼ばれて、傍の滝倉川に架かる橋には「黒門橋」と、その名を残しています。

❷猿田彦神社(さるたひこじんじゃ)

御祭神は猿田彦大神と大田命であります。古くは古市の久世戸近くにありましたが、水害などに遭い、現在の地に遷されました。猿田彦大神は天照大御神の御孫(瓊瓊杵尊)が降臨される際に高千穂の峰に導かれました。その後本拠地の伊勢の五十鈴川の川上に戻られて、広く国土を開拓されました。

大田命は猿田彦大神の子孫に当たる神で、倭姫命が五十鈴川の此の地に着かれて、此処を御鎮座の地と定めたとき、この地を献上して神宮が創建されました。その末裔は宇治土公(うじとこ)と名のり、神宮の祭祀に玉串大内という職掌でご奉仕をしてきました。

猿田彦神社は大田命の子孫の宇治土公家が累代奉祀する神社であります。

現在は、「道ひらきの神様」として開運、地鎮祭のお砂や交通安全祈願などで、多くの参拝者が訪れています。

❸荒木田守武の墓所(あらきだもりたけ ぼしょ)

荒木田守武(1473〜1549)は室町時代後期の内宮の神官で、15歳で禰宜になり、69歳で一の禰宜(長官)になりました。若い頃から連歌を好み、京都の三條西実隆に師事し、宗祇や宗長という連歌の師との交流も深くありました。連歌の座興にしかすぎなかった俳諧を、独自の文芸として独立する基礎を築きました。戦国乱世の大永5年(1525)9月庚申の夜に人心の荒びを憂いて一夜で詠んだ『世中百首』という歌集があります。五輪塔は「伊勢俳諧の始祖」といわれる荒木田守武のお墓です。

❹慶光院家の墓所(けいこういんけ ぼしょ)

神宮には20年毎に社殿を新しく建て替える式年遷宮があります。持統天皇4年を第1回とする遷宮は、平成25年(2013)に第62回が行われましたが、平穏な時代ばかりではなく、幾度か中断の危機に見舞われました。その最大のものは室町時代後期から戦国時代に掛けての約120年間で、世の中の混乱や経済的理由により式年遷宮は中断し、神宮の社殿は荒れる一方となりました。

この困難な時代に女性で尼という立場ながら、全国を勧進して資金を集め、式年遷宮の復興に多大なる貢献を行ったのが、慶光院の尼達であります。初代の守悦は宇治橋の架け替えを行い、3代目清順は外宮の遷宮を、4代目の周養は内宮の遷宮を復興させました。その後明治に至るまで、計15代の慶光院は徐々に立場を変えながらも、遷宮に関わり続けました。五輪塔はその尼達の墓標です。

❺饗土橋姫神社(あえどはしひめじんじゃ)(内宮・所管社(ないくう しょかんしゃ))

御祭神は宇治橋鎮守神であります。饗土とは内宮神域に悪しきものが入らない様に防ぎ祀る場所の意味であります。古くは宇治橋の前の松の木近くにありましたが、明治42年に現在の場所へ遷されました。20年毎に造り替えられる宇治橋の渡初式には、饗土橋姫神社に安全を祈願いたします。

宇治のまち 歴史めぐり

ガイドマップ

⑥ 津長神社（内宮・摂社）

御祭神は栖長比賣命であります。津長という社名は、五十鈴川の洲長になつた所の意味で、此の辺りは大古から、五十鈴川を遡ってくる船の船着き場でありました。倭姫命もこの津長原に着いて上陸され、此処に津長神社を定められたと伝えられています。この津長原をお守りくださる神様として御鎮座されました水の神様であります。

御一緒に、新川神社・内宮の末社（新川比賣命・川の神様）岩井神社・内宮の末社（高水上命・石清水の守り神）が祀られています。

⑦ 大水神社（内宮・摂社）

御祭神は大山祇御祖命であります。五十鈴川の辺りの山々をお守り下さる、山の神を祀っています。

このお社も倭姫命が御定めになり、御鎮座されました。御一緒に、川相神社・内宮の末社（細川水神・島路川と神路川をお守りする神様）熊淵神社・内宮の末社（多支大刀自神・五十鈴川の川の流れをお守りする神様）が祀られています。

⑧ 旧・林崎文庫

元禄３年（1690）に、今在家町丸山にあった「内宮文庫」が、五十鈴川の氾濫から守るために林崎に移され、「林崎文庫」となりました。階段を登って表門を入ると、講堂と書庫があります。

内宮祠官が学問を深め、その子弟を教育する場として、さらには伊勢と文化的先進地との交流の場として、明治まで利用されました。沢山の書物は、明治39年（1906）に神宮文庫が造られて移されました。　現在の建物は、当時の状態に近いもので、教育学芸史上価値のある遺跡として昭和29年（1954）に国の指定史跡になりました。年2回の公開日には、見学が出来ます。

※公開日
　春の神楽祭に合わせて（4月28日～30日）
　秋の神楽祭に合わせて（9月21日～23日）
※平成３０年度は調査期間のために公開はありません。

⑨ 宇治神社（宇治四ヶ町の氏神様）

御祭神は大山祇神・天見通命・彌武彦神他21座が祀られています。明治時代に宇治地内の神社を合祀しました。この場所は現在は中村町の宇治山田神社に合祀されている、内宮の末社の那自賣神社があったとも。また神路山にあった小祠が万治３年の洪水で流されて、此処に漂着したので祭祀したと云う2つの説があります。いずれにしても古くは中之切の森の中に鎮座していた社であります。

1月17日には弓の事始めが行われます。

⑩ 宇治橋

五十鈴川に架かる和橋で、20年毎に架け替えもしくは大修繕が行われます。桧造りで橋脚は欅です。長さ101.8m、巾8.42mで、欄干の上に16基の葱花形金物（擬宝珠）が据えられています。外と内に高さ7.44mの大鳥居が立っています。外側の鳥居は外宮の、内側の鳥居は内宮の旧御殿の棟持柱が使用されています。

⑪ 内宮

天照大御神様が祀られています。倭姫命によって第11代垂仁天皇26年（紀元前４）に御鎮座されました。社殿の造りは、唯一神明造りといいます。弥生時代の穀倉の様式を伝えています。

天武天皇の御定めにより、20年毎に御殿を建て替えることになり、第１回が持統天皇によって行われました。平成25年10月に第62回の遷宮が行われました。

奥には5.500ヘクタールの神宮林があり、植樹をして御遷宮の御用材を育てています。

⑫ 宇治法楽舎跡

明治の廃仏毀釈により、現在の宇治には1つの寺院もありませんが、神宮御鎮座以来の永い歴史の中で、仏教との関わりは少なからぬものがありました。御遷宮の復興に力をつくした慶光院は、その最たるものでありますが、鎌倉時代の蒙古襲来の時に、敵国退散の祈願法楽をおこなった宇治法楽舎も、良く知られております。神仏習合の歴史的施設で、『通海参詣記』には「異国降伏の為に建治元年（1275）三月法楽舎を立て二百十六人の供僧を置いて・・・・」とあり、国難に際し祈願法楽が行われました。また外宮の法楽舎は八日市場町にあり、移転する前の世義寺の境内に立てられました。

⑮ 荒木田守武屋敷跡 ▶

おかげ横丁の近くに、荒木田守武の屋敷跡があります。現在は石柱の碑が立っています。

近くの神宮会館のバラ園には、守武の詠んだ句碑「元日や　神代のことも　思はるる」が建立されています。

⑬ 宇治二郷会合所跡

古代より神領を持ち、私幣禁断（個人でお供えが出来ない）という規則を持つ神宮は、参拝者のいないお社であったと考えられます。それが平安時代の末頃から、武家が台頭するなど世の中が大きく変化をする中で、御師が発生します。そして参宮者を迎える町へと変化し、内宮の門前町として発展したのが「宇治」、外宮の門前町は「山田」であります。この両町は年寄と呼ばれる有力者の合議制で運営される自治の町でも在りました。江戸時代に入ると徳川幕府から朱印状が下され、その存在が公に認められるほどでした。現在の市役所の機能の他に警察・裁判・神宮の警護なども行い、山田奉行と協力しながら町の運営にあたりました。ちなみに「宇治二郷」とは、岡田郷（現在の今在家・中之切・浦田）と、岩井田郷（館）の事を指します。

⑭ 庚申さん（館町 岩井田山）

庚申は平安時代から始まり、江戸時代に盛んになりました。無病息災を祈る民間信仰で、庚申の日には人々が塔のあるお堂に集まり徹夜で健康長寿を願いました。現在も庚申の日、毎年8月15日に町を挙げて庚申祭礼を催し、子供達の健康や安全、そして町の発展の為に福引きやゲームなどを行い、皆で賑やかにお祭りを行います。

古くは今の浦田橋の付近にありましたが、川の氾濫や洪水などで疫病が蔓延したことから、現在の地に遷して無病息災を祈願したと伝えられています。

此処にはもう一つ、六地蔵が彫られた石像物もあります。また、小祠は無くなりましたが、岩井田稲荷も祀られており、現在も毎年寒の稲荷参りを行っています。

⑯ 祭主職舎（旧・慶光院館）

神宮式年御遷宮の復興に多大な貢献を行った、代々の慶光院の尼僧たち、その慶光院の客殿が、現在、神宮祭主の宿舎として使用されています。寺伝では、豊臣秀吉が庫裡・方丈・総門などと共に四世周養上人の客殿として建設させ、慶長年間初頭（1597～98）のころに完成したと伝えられていますが、形式から見ますと、現在の建物は江戸時代の初期にあたる寛永の末頃（1630～40）の建築と推定されます。　屋根は入母屋造りで本瓦葺き、主屋に中門廊を突き出させる建築様式は、「主殿造」と呼ばれ、現存する遺構は少なく、高い歴史的価値を有しています。

おはらい町通りに面した表門は、御師太郎館太夫邸の正門を明治6年（1873）に移築したものであります。　平成14年に国の重要文化財に指定されました。

⑰ 神宮道場（旧・神宮司廳）

神宮司廳の旧庁舎で、明治36年（1903）に建築されました。明治中期の民族的伝統を意識した、折衷様式の貴重な建物です。ここでは伊勢神宮に関わる全ての事務が執り行われていました。昭和51年（1976）からは「神宮道場」と改称して、全国の神職や神職を志す学生の、研修施設として活用されています。現在、神宮司廳は宇治橋を渡った正面左の丘に移されています。

⑱ 藤波の松（藤波家屋敷跡）

内宮長官禰宜（一の禰宜）藤波氏富（1607～1687）が従二位に叙せられた記念に植えた松の木でありました。その松は昭和42年に枯死し、二代目が植えられましたがこの松も平成28年に枯死し、現在は石碑が残っています。